

地域の新しい語り方 ―昭和堂刊「大学的地域ガイド」シリーズを読む―

Books Review of *DAIGAKU-TEKI CHIIKI GUIDE* Series
Published by Showado

梅津 顕一郎・倉 真一

本書評は2009年以来、これまで昭和堂から31冊刊行されている「大学的地域ガイド」シリーズを、「総力戦体制」の時代の黄昏、ポスト総力戦体制の時代における「新しい地域の語り方」を示すものとして評論を試みたものである。評者らは、従来の地域の見方・語り方を相対化かつそれに替わりうる3つの視点（内発的な視点、関係的な視点、歴史的な視点）から、シリーズのうち3冊（『大学的沖縄ガイド』、『大学的香川ガイド』、『大学的長崎ガイド』）を取り上げた。最後に、新しい地域の語り方の実践として大学的地域ガイドの宮崎版を想定した時、地域ガイドの前提となる価値付けが何であるか自覚し続けること、いわば価値自由的な態度の重要性について確認した。

キーワード：大学的地域ガイド、総力戦体制、新しい地域の語り方、内発的な視点、関係的な視点、歴史的な視点、価値自由

目次

- I はじめに
- II 評論の視点
- III 「大学的地域ガイド」を読む
- IV おわりに―ありうべき『大学的宮崎ガイド』のために

I はじめに

2009年より昭和堂から出版されている「大学的地域ガイド」シリーズは、『大学的奈良ガイド～こだわりの歩き方』以降、これまで計31冊刊行されている地域ガイドブックである^(註1)。その名のとおり、それぞれの地域の大学が主体となって企画・編集されているところに同シリーズ最大の特徴がある。形式的には観光ガイドのスタイルをとりつつも、敢えて「大学的」、「こだわりの歩き方」と銘打つことにより、アカデミックな研究的視点が内包されていることを示している。すなわち、「観光」という実践的な活動を媒介として、学問研究が果たしうる地域貢献の可能

性を示す内容となっており、この文脈に「地域文化・社会」の読み方も位置付けられている。

評者らは、これまで宮崎公立大学共同研究プロジェクトの一環として、従来の「宮崎」イメージにとらわれない、宮崎という地域の新しい語り方を模索してきた。そのような問題意識に立ったとき、同シリーズを鳥瞰し、論評することは、従来とは違った立ち位置からの宮崎の見方、語り方を模索するための確かな手掛かりを与えてくれることだろう。

新井克弥(2006)によれば、従来の「宮崎」イメージは、他地域と比べ、比較的単純なものとして語られてきた傾向が強い。偉人、有名人、名所、旧跡、名物などを示す「地域語彙」の数が、他県と比べバリエーションが少ないことを新井の研究は示している。

本来、「地域の魅力」に対する感じ方は十人十色、多種多様であろう。地域に生きる個々の人々にとって、その意識世界(=生活世界:Lebenswelt)のあり様は常に多元的であり、そこに浮かび上がる生活情報・文化情報もまた一様であるはずがないからである。

しかし留意したいのは、このような生活世界の多元性を超え、「地域性」や「地域らしさ」という、ある程度まとまった「全体イメージ」によって、私たちの地域生活は色づけられていくことである。無論それは個々の暮らしの中で広く生成され、伝承され、共有され、蓄積されてきた。しかし、とりわけ近代以降においては、マスメディアや学校教育等、構成員全体に、一様の情報を同じような効果で伝達するような装置によって方向付けられ、再生産されてきた部分が多い。

このような事情を鑑みると、宮崎地域における地域イメージの単純化、貧困化、言い換えれば「全体イメージ」のバリエーションの少なさは、当該地域における「全体像」情報の貧困さと、それをもたらした教育機関、地域メディア等の情報の貧困さに起因するものではないだろうか。

II 評論の視点

1 ポスト総力戦時代における「地域の語り方」

ここで、今回の書評を執筆するにあたっての着眼点について述べておきたい。

まず挙げられるのは、「ポスト総力戦体制」を想定した地域の見方、語り方を探ることである。全国的な「地方」の傾向として、明治以降の近代国家の形成過程において、中央集権的な分業体制が全国レベルにおいて形成される中、地方の個性、地域らしさもまたそのような構造の中に組み込まれざるを得なかった。そのことはある程度やむを得ないにせよ、今日において、あるいはこれからの「地域イメージ」を形成するためには、かつての中央集権的な目線(まなざし)によって形作られてきた「地域らしさ」を相対化する必要がある。

端的にいうなら、産業面にせよ、文化的側面にせよ、中央集権型国民国家における、分業体制の中の特定の役割を地域が担うことをもって、地域の個性(とりわけ未来に向けての、誇り高い地域らしさやお国自慢)と位置付けるような考え方から脱却する必要がある。

宮崎に限らず、それぞれの地域の魅力を語る言語の現状を見ると、思いのほか中央集権型分業

社会の時代に作られたものから脱却しきってはいないことが伺える。例えば宮崎の場合、未だ南国イメージを看板としている点や、かつての新婚旅行ブームの掘り起こし、さらには戦前から続く神話の国イメージの売り出しなどがこれにあたる。

ただし、これらの素材自体が悪いというわけではない。問題は、「全国に誇るお国自慢＝国家的レベルでの分業システムにおける地域の役割」という語り方自体が陳腐なものとなったということである。我々が目指すのは、これまでのように、全国区を意識したライバル地域（国家システムにおける役割上競合関係にある地域）に対しての優位性を示すのではなく、むしろそのような地域と連動、協働し、その輪の中で宮崎らしい役割の果たし方＝「個性」を考えることである。

2 内発的な視点と関係的な視点、歴史的な視点

換言すれば、これからの時代における地域の個性とは、それぞれの地域が起点（主体）となり語られることを前提としつつ、同時に各地域が中央を意識した役割関係から自由な、「勝手なつながり」を模索する中から認識されるものである。当然、地域の語り方もそのような文脈に寄り添ったものとなるはずである。

ここに新たな意味での内発的な視点と外在的な視点が想定されることとなる。すなわち、純粋に地域に生きる生活者としての内発的な視点と、他地域とのつながり、関係性において浮かび上がる、関係的で動的な視点である。

上記の視点はこれからの時代における地域の見方・語り方を構成する有力な視点になると評者らは考えるが、他方で現状では中央集権的国民国家の1つの完成形ともいえる、山之内靖（2015）がいうところの「総力戦体制」のもと作られてきた地域の見方・語り方（地域イメージ）に、私たちは多かれ少なかれ囚われたままでもある。だとすれば、私たちの地域の見方・語り方がいつどのように生まれ、普及して現在にまで引き継がれてきたのか。また地域が「総力戦体制」というシステムに包摂されるなか、内発的な視点と外在的な視点がいかに隠蔽され周縁化されていったのか。どのような地域の見方・語り方をも絶対化せず、one of them として歴史的に相対化していく視点もまた想定されなくてはならない。

III 「大学的地域ガイド」を読む

前置きが長くなったが、以下では昭和堂より出版されている「大学的地域ガイド」シリーズの中から、いくつかの地域ガイドを取り上げ、同シリーズが銘打つ「こだわりの歩き方」（それは同時に地域の見方、語り方でもある）が持つ可能性を、記述の対象と着眼点、視角の在り方に焦点を当てつつ探してみたい。

「大学的地域ガイド」シリーズに関しては、これまで『大学的奈良ガイド』については小川伸彦（2019）や内田忠賢（2020）、『大学的徳島ガイド』については庄武憲子（2018）、また『大学

的オーストラリアガイド』については原田容子（2022）らによる優れた評論（書評）が存在するため、ここではそれ以外の地域、具体的には『大学的沖繩ガイド』（沖繩国際大学 & 宜野湾の会編、2016年）および『大学的香川ガイド』（香川大学教育学部監修、2022年）、『大学的長崎ガイド』（長崎大学多文化社会学部編、2018年）の3冊について取り上げる。

1 『大学的沖繩ガイド』（沖繩国際大学 宜野湾の会編）

（1）『大学的沖繩ガイド』について

『大学的沖繩ガイド』は、沖繩国際大学宜野湾の会の編集により、2016年に出版された。その内容は、4部構成からなっている。第一部では「沖繩ナウ」と称し、沖繩基地の現状、観光業、修学旅行と平和教育について紹介、考察している。第二部は「沖繩を楽しむ」として、人々の娯楽や観光資源となっている文化として、ハーリー、綱引き、エイサー、闘牛、空手、スポーツアイランドなどが語られている。第三部では沖繩・琉球の歴史が有史以前にまでさかのぼり取り上げられている。ここでは「琉球王国の世界」と題し、旧石器時代、グスク、首里城、亀甲墓が重点的に紹介されている。最後に第四部では「沖繩アラカルト」と題し、琉球ことば、芸能、音楽、泡盛など、人々の生活に寄り添い彩る様々な楽しいものについて取り上げられている。

琉球文化、米軍基地、南国リゾート、自然。沖繩には様々な顔がある。その中に貫かれる「沖繩らしさ」について、編者の一人である田名真之は、「川辺の足のようなもので、ちょっとした風にも揺れるが、台風でも折れることのない、弱いからこそしたたか強い」と述べている。

では、それはどのような意味での強さであり、したたかさなのだろうか。このことを手掛かりに、以下「第一部・沖繩ナウ」における基地問題と平和慰霊施設群に関する記述を中心に論じてみたい。

（2）平和・基地問題の記述における地域内発的視点と外側からの視点

第一部で扱われている沖繩基地の現状、観光業、修学旅行と平和教育といったテーマはいずれも、「国家」を抜きには語れない、中央集権的な視点が前提とされるものとして理解されがちである。しかし、同書におけるこれらの記述には、地域側からの内発的なものと外部に存在するものとを交錯させる視点が見られる、と評者は考える。

例えば、在沖米軍基地問題に関する記述において議論の基底をなしているのは、在日米軍基地が沖繩に著しく偏って存在していることと、地位協定による日米間の刑事的・司法的不均衡をもたらす諸問題についての、生活者視点からの問題提起である。面積にすると日本全国の0.6パーセントにすぎない沖繩県には、現在日本国内の73.7パーセントに当たる「米軍専用施設・区域」が集中している。結果、1972年の本土復帰後から同書執筆時の2014年までの42年間で、5862件もの米軍関係者による犯罪と650件超の米軍機墜落事故が起きている。また「日米地位協定」の関係から、沖繩県内で起きたものであるにもかかわらず、日本人による事故、犯罪同様の検証、捜査ができない状況がこの間全く変わっていない。同書では、このような事実関係を踏まえ、「基

地で潤う沖縄」という言説がいかに実情と乖離したものであるか、近年の観光産業の盛り上がり等も考慮すると「在沖縄基地」が地元生活にとっていかに不経済であるかを、データを挙げながら考察している。

沖縄の在日米軍基地の問題については、様々な見解があるだろう。無論ここでそれらの是非について踏み込んで議論することは、評者の役割を超えたものであるが、沖縄の生活者たちの多くが、日常において常にこうした危険性と接し、向き合っているという事実があることが議論の出発点となること、そしてその事実は、地域内部の生活者としての視点に立つことで切実さとしての強いリアリティを持つということは改めて指摘しておきたい。

一方、摩文仁平和祈念資料館、平和の礎に関する記述には、平和を祈念する沖縄県民の「内発的な」想いだけでなく、他の都道府県に生きるものの（その意味では沖縄県民から見れば「外在的な」）想いが接点を持ち、共同した事実が示されている。

平和祈念公園内には、国立沖縄戦没者墓苑を中心に、全国の都道府県のうち32の府県の慰霊塔・慰霊碑が建てられているエリア（通称「霊域」）がある。同書では、中でも愛知県の「愛国知祖之塔」が浦添城跡から当地へ移転された経緯を取り上げ、一連の事業が愛知県出身の沖縄戦犠牲者遺族と沖縄県出身の愛知県民との共同で進められている経緯を紹介し、「沖縄戦」の記憶の断絶が存在しない点を高く評価する。沖縄県以外に生活する我々は、ともすると沖縄戦を「沖縄で起きた悲劇」という狭い視野で理解しがちである。しかしこうした共同による慰霊施設の存在は、沖縄戦を「沖縄のもの」としてのみ捉えるのではなく、「自らの暮らす地域とつながったもの」、さらには広く「アジア・太平洋戦争」のなかのものとしてとらえる視点を思い起こさせてくれる。

（3）沖縄における「うち」と「そと」の意識

以上の筆者陣に現れる視点は、本書評が冒頭で提示した「内発的視点と外在的視点の交錯」という、地域を語る新しい視線と同じベクトルを示すものである。このことについて、沖縄に関連して、話をもう少し続けよう。

評者（梅津）の個人的な話で恐縮だが、私の妻は沖縄県の出身である。よく知られているように沖縄では、しばしば沖縄出身者を「うちなー」、県外出身者を「ないちゃー」と呼び、両者を別なものとして扱うことが多い。本書評の文脈に即して言えば、基本的には、内発的に「地域」を語るができるのが「うちなー」であり、その外にいる外在的な存在が「ないちゃー」となるのであろう。しかし評者個人の見解を言えば、それらは決して両者を遮断する言葉ではない。むしろ文節を入れることで、「もともとは違うもの」同士が、どのように関わり、共有するものを見つけ、つながりを作っていくかを模索する言葉であるように思える。

評者の経験の例で言えば、私は個人的に沖縄料理と泡盛が大好きであり、結婚当初しばしば「あの婿はないちゃーだけど、飲み食いしているときはうちなーと同じ」等と親戚縁者から言われたものである。それは結婚以降しばらく続いたが、やがて私がそのような人間であることは親類筋

では所与のこととなり、言われなくなった。しかしそれでもなお評者が完全に「うちなー」扱いされるわけでもない。妻に言わせれば、良い意味で「うちなー」と多くのものを共有する「ないちゃー」という扱いになるのだそうだ。

他の都道府県にはない独自の歴史を持つ沖縄には、今でも独特の生活文化がある。沖縄人の内発的なスタンスから浮かび上がるものを、外在的な存在に完全に同化させることはできまい。しかし、だからと言って断絶を作るのではなく、勿論「うちなー」ペースで全てを進めようというのでもなく、あくまで内と外とが、それぞれの「らしさ」を保持したままつながるというのが沖縄的スタンスであり、しなやかな強さなのではないだろうか。

(4) 視点の交錯と議論の客観性

ここで、同シリーズの役割を改めて考えてみたい。大学的と銘打つことの意味は、トリビアルな知識の開陳ではない。また、大上段に構えた、むき出しの「当為命題」を押し付けることでもない。希望や可能性、あるいは伝統的な価値、逆に課題や問題、そのような話題としての正負を問わず、地域の内発的視点に浮かび上がる議論としてこれを取り上げ、それらを外からの目線と交錯させることが肝要であろう。同シリーズにおいては、編集の方針が各大学の担当者にある程度任されていることもあり、歴史、社会問題、生活文化など、主眼とするテーマ、「語り口」ともに多種多様なものが存在するが、その際に不可欠なものとして、論点の整理、科学的知見による議論の展開は必須である。

『大学的沖縄ガイド』においては、特に地域を客体としてとらえ、その外側にいるものとして記述する(外在的目線からとらえる)のではなく、地域文化の当事者として自身を位置づけ記述する(内在的目線からとらえる)傾向が強い。しかしそれは、地元「だけの」言い分を主張するものではなく、地域内発的な議論を、外在的な議論の交錯する地平に上げて考え止揚するものであり、科学的な客観性はまさにそのためにあるとあって良い。

換言すれば、地域に生きる人々の思いと情熱に出発点を置きつつ、客観的・検証的に考察していくことに、地域に根差したアカデミズムの役割があるといえる。

2 『大学的香川ガイド』(香川大学教育学部監修) & 『大学的長崎ガイド』(長崎大学多文化社会学部編)

(1) 『大学的香川ガイド』と『大学的長崎ガイド』が共有する視点

この2冊の大学的地域ガイドが共有している視点、それは人びとが地域に抱いているイメージそれ自体を、その現状や歴史性を検討の対象とすることで相対化しつつ、地域を描き直そうとする視点である。そうした視点は両ガイドにおいては冒頭の部分において、意図的かつ積極的に提示されている。例えば、『大学的香川ガイド』では序言の「香川県の『ガイド』を考える」において、『大

地域の新しい語り方 ―昭和堂刊「大学的地域ガイド」シリーズを読む― (梅津顕一郎・倉真一)

『大学的長崎ガイド』では、序言に続く第1部「長崎は今どうみられているか」においてそれは提示されている。

以下では、2冊の大学的地域の冒頭部分にみられる地域イメージの現状や歴史性を相対化していく視点について、おのおの具体的に論じていきたい。

(2) 「香川県の『ガイド』を考える」にみる内発的な視点、歴史的な視点

『大学的香川ガイド』の編者の1人である守田逸人による序言は、香川大学教育学部の学生を対象に行った香川県に対するイメージを尋ねたアンケート調査を中心に話が展開していく。

アンケートでは設問1として香川県に抱いているイメージを自由に記述してもらい、設問2では特産物、史跡名勝、人物など香川県に関するもので広く知れ渡っていると思うもの2つを回答させている。結果からいうと、設問1・2ともに「うどん」がそれぞれ上位2位と1位、設問2では「金刀比羅宮・金比羅参り」が2位と(予想どおり)上位を占めているのだが、むしろ著者は(予想と異なり)学生の回答が集まらなかったものへと読者の関心を向けていく。曰く、「金刀比羅宮については多くの関心を集めたものの、空海や西行、四国遍路など、歴史的・文化的遺産に関する回答はそれほど得られなかった」、「多くの学生が日常的に目にする筈の『ため池』への関心も、それほど感じられない」、「多くの学生の間近にある筈の『海』そのものについては『父母ヶ浜』が2票挙がったのみで」、「さらにいうと『港』に注目した回答はゼロであった」(ivページ)。ここで強調されるのは、学生たちに限らず私たちの「社会を見る目」がいつ限られた視点になりがちな点である。

なぜ地域「社会を見る目」が限定されてしまうのか。全国区で有名な「うどん」や「金刀比羅宮」のイメージばかりが優越し、身近な生活世界を構成する多様な諸要素である筈の「ため池」や「海」に、なぜ生活者としての内発的な視点や関心が向けられないのか。評者としては、こうした疑問への回答をぜひ期待してしまふところがある。しかし、本ガイドの編者でもある著者は、「ボーとしていると視界から通り過ぎてしまうような事象にも意識的に目を向け」、「知られた事象も、そうでない事象も吟味し、香川県を理解するために不可欠な論考を揃えた」と、やや啓蒙主義的にもみえる意図の方をむしろ強調している(vページ)。ただし、これは評者の期待に答えていないというより、本ガイドの各論考を手がかりに、読者自身が視野や関心を広げ、自問自答をしていくような性格のもの、いわば読者への「宿題」として捉えておくべきなのかもしれない。

(3) 「長崎は今どうみられるのか」にみる関係的な視点、歴史的な視点

『大学的長崎ガイド』の序言に当たる「『長崎』とは何か―世界につながる長崎」において、同ガイドの編者でもある木村直樹は、「長崎は歴史的にみて、常に日本社会と海外との接点であり続けた」(iiiページ)と端的にその特色を剔出してみせる。そのうえで、「長崎は歴史的につねに外国との関係の上になりたち、そして、文化をはぐぐんできた。日本列島の他の地域とは異なる特

性がある。その中で、日本の国境線としてのフロンティア(frontier)ではなく、面的な広がりを持った国境地帯(boundary)としての顔を持つことが、独自の文化やコミュニティを育ててきた」(iv ページ)と述べている。

国民国家とは常に明確なフロント(前線)として国境線を外部との間に引かずにはおれないものであるが、それとは異なる面的な広がりや許容する国境地帯としての顔を持つ「長崎」とは、国民国家の枠に収まらない、むしろそれ(国民国家)とのズレを抱え続けてきた地域という言い方もできるだろう。ただし、評者としてはグローバル化とそれがもたらす国民国家の揺らぎという今日的な文脈のもとでは、長崎のこうした歴史的な立ち位置は、ひとり長崎の特色というより宮崎も含む「日本列島の他の地域」においても、その濃淡はあれ普遍的にみられる特色となりつつあると考えたい。

国民国家とのズレを潜在させている長崎への見方・語り方も、一つの方向に収まらない様々なズレへと引っ張られ、常に変化する(ズレる)可能性を孕むことになるだろう。続く第1部のタイトルが、「長崎は(過去)どうみられてきたのか」でも「長崎は(現在)どうみられているのか」でもなく、他ならぬ「長崎は今どうみられるのか」という可能態として表現されていることがその傍証である。

以下、第1部では「長崎新地中華街」、「長崎原爆を伝える」、「国境の島・対馬」、「長崎を観る」の各章が続くが、例えば、「長崎原爆を伝える」で山口響は次のように述べている。「原爆の捉え方にしても、原爆体験の継承にしても、それが単一の枠にはまったものである必要はまったくない。長崎の街を歩いてその来し方を知るとは、原爆とは一見関係なさそうに見えても、『長崎原爆を伝える』営為とどこかで接続してくるはずだ」(39 ページ)。可能態としてのズレは、街のどこにでも遍在かつ潜在しているのである。

IV おわりに—ありうべき『大学的宮崎ガイド』のために

さて『大学的長崎ガイド』の第1部の最終章「長崎を観る」において、葉柳和則は「可能なものへの想像力」(評者が「可能態」と呼んできたものとほぼ同義)を含む「見えないものへの想像力」を働かせ、見えないものを「観るためには、何らかの媒介(medium)が必要である」(65 ページ)と述べている。

こうして見えないものを観るための媒介として<ガイド>は要請されるのだが、そこにある「ひとつの危険」を葉柳は指摘することを忘れない。「それは<ガイド>が前提とする価値付けの枠組みに囚われてしまう」(66 ページ) ことであり、「何かに価値を見出すことは、何かを周縁化することと表裏一体の関係にある」(67 ページ) ことである。

ではそうした危険に陥らず、「大学的ガイドブック」を作るとはどのような営為になるのだろうか

か。少し長いがとても示唆的なので、引き続き葉柳の言葉を引用しておきたい。

ガイドのおかげで私たちは「見えないもの」を見るための手がかりを手にすることができる。しかし、ガイドに頼ることで、それが周縁化しているもののそばをそれと気づかずに通り過ぎてしまっているかもしれない。このことに自覚的であること、自分も五感とガイドの説明との間にあるズレに敏感であること、ささいな違和感を大切にすること。別様の説明の可能性を考へてみること、可能ならば検証し、それにもとづいて新しい文脈を、新しい見方を提示すること。

(出典) 葉柳和則 2018「長崎を観る」、長崎大学多文化社会学部(編)『大学的長崎ガイドーこだわりの歩き方』昭和堂：67 ページ。

ではいま仮に『大学的宮崎ガイド』を作るとなった場合、〈宮崎ガイド〉が前提としてしまいそうな価値付けとは具体的に何だろうか。例えば、大学の地域貢献が強く求められる今日、〈大学的宮崎ガイド〉こそ、地域貢献の手段として見做される可能性は極めて高いだろう。しかし、そこで声高に叫ばれている「地域」とは「貢献」とは、一体誰にとって地域であり、何のための貢献なのだろうか。少なくとも「地域」も「貢献」も、いかなる利害関心とも交わらない意味的な真空に浮かぶ、価値中立的な概念では決してない。

武田俊輔(2008)によれば、1930年代の日本において盛んに提唱された「愛国心と結びついた郷土教育」に対し、「鋭い批判を加えたのは、かねてから郷土研究を提唱しその指導的立場にあった」柳田国男だったという。愛郷精神の涵養を通じて、国民をいわば総力戦体制に向けて動員しようとした郷土教育に対して、「果たして郷土のどの点を、どの種の人に愛せしめるのであるか」、「田舎者と呼ばれるのを不愉快に思うような人々に、お国自慢の種を供するだけ」として柳田は批判した〔武田、2008：85-86 ページ〕。

柳田に倣って、総力戦体制の時代の黄昏、ポスト総力戦体制の時代に生きる我々もまた問わなくてはならないだろう。「地域貢献とは果たして地域のどの点へ向けて、どの種の人へと何をもって貢献せしめるのであろうか」、「地元には何もないと自嘲自虐する人々に、実はこんなに豊かな文化や歴史があったとお宝自慢のネタを提供するだけにならないだろうか」と。反省的な問いをもって自らの拠って立つ前提や価値観に自覚的であり続ける価値自由的な態度の先に、「ありうべきもの」(可能態)として新しい地域の語り方と、〈宮崎ガイド〉の輪郭がはじめて浮かび上がることになるだろう。

注記

(注1) 昭和堂刊「大学の地域ガイド」シリーズの既刊本は、以下の表のとおりである。

昭和堂『大学の地域ガイド』シリーズ既刊一覧

	書名	編著者	出版年月日
①	大学の奈良ガイド	奈良女子大学文学部なら学プロジェクト（編）	2009/3/1
②	大学的やまぐちガイド	山口県立大学国際文化学部（編）、伊藤幸司（責任編集）	2011/3/30
③	大学の滋賀ガイド	滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科（編）	2011/7/20
④	大学の福岡・博多ガイド	高倉洋彰ほか（編）	2012/3/15
⑤	大学の広島ガイド	川上隆史ほか（編著）	2012/3/30
⑥	大学の京都ガイド	同志社大学京都観学研究会（編）	2012/10/31
⑦	大学の北海道ガイド	札幌学院大学 北海道の魅力向上プロジェクト（編）	2012/12/25
⑧	大学の愛知ガイド	愛知県立大学歴史文化の会（編）	2014/3/31
⑨	大学の福岡・太宰府ガイド	西高辻信宏ほか（編）	2014/3/31
⑩	大学の沖縄ガイド	沖縄国際大学 宜野湾の会（編）	2016/3/25
⑪	大学の熊本ガイド	熊本大学文学部（編）、松浦雄介（責任編集）	2017/3/30
⑫	大学の徳島ガイド	四国大学 新あわ学研究所	2017/7/10
⑬	大学の長崎ガイド	長崎大学多文化社会学部（編）、木村直樹（責任編集）	2018/4/25
⑭	大学的和歌山ガイド	和歌山大学観光学部（監修）、神田孝治ほか（編）	2018/10/25
⑮	大学の鹿児島ガイド	鹿児島大学法文学部（編）	2018/11/30
⑯	大学的東京ガイド	立教大学観光学部（編）	2019/3/30
⑰	大学の高知ガイド	高知県立大学文化学部（編）	2019/3/30
⑱	大学の青森ガイド	弘前大学人文社会科学部（編）、羽淵一代（責任編集）	2019/3/30
⑲	大学の静岡ガイド	静岡大学人文社会科学部・地域創造学環（編）	2019/3/30
⑳	大学の富士山ガイド	都留文科大学（編）、加藤めぐみほか（責任編集）	2020/2/29
㉑	大学の富山ガイド	富山大学地域づくり研究会（編）、大西 宏治ほか（責任編集）	2020/10/20
㉒	大学的愛媛ガイド	愛媛大学・松山大学「えひめの価値共創プロジェクト」（編）	2020/10/20
㉓	大学的新潟ガイド	新潟大学人文学部附置地域文化連携センター（編）	2021/3/30
㉔	大学の神戸ガイド	甲南大学プレミアプロジェクト神戸ガイド編集委員会（編）	2021/3/30
㉕	大学的オーストラリアガイド	鎌田真弓（編）	2021/6/20
㉖	大学的香川ガイド	香川大学教育学部（監修）、守田逸人ほか（編）	2022/3/31
㉗	続・大学の奈良ガイド	奈良女子大学文学部なら学プロジェクト（編）	2022/4/25
㉘	大学的大阪ガイド	大阪公立大学現代システム科学域（編）、住友陽文ほか（編）	2022/4/25
㉙	大学の相模ガイド	塚田修一（編）	2022/11/25
㉚	大学の栃木ガイド	松村啓子ほか（編）	2023/3/30
㉛	大学の岡山ガイド	岡山大学文明動態学研究所（編）	2023/3/31

(注) 昭和堂HP <http://www.showado-kyoto.jp/>（閲覧日：2023年10月21日）より筆者作成

参考文献

- 新井克弥 2006「かるたの力―郷土かるたではじめる地域おこし」、宮崎公立大学広報委員会（編）『地域を創る―新しい宮崎をめざして』、鉦脈社：139-167 ページ。
- 内田忠賢 2020「地元学・地域学の系譜―『都市民俗生活誌』・『なら学』の成果から―」、『日本地理学会発表要旨集』（2020年度日本地理学会秋季学術大会）日本地理学会：130 ページ。
- 小川伸彦 2019「学知・地域・観光：ハイブリッドメディアとしての『大学的奈良ガイド』」、『奈良女子大学社会学教育研究論集』（3）、奈良女子大学社会学教育研究会：1-9 ページ。
- 沖縄国際大学&宜野湾の会（編）2016『大学的沖縄ガイド―こだわりの歩き方』昭和堂。
- 香川大学教育学部（監修）2022『大学的香川ガイド―こだわりの歩き方』昭和堂。
- 倉 真一 2006「博覧会からみた宮崎の近代」、宮崎公立大学広報委員会（編）『地域を創る―新しい宮崎をめざして』、鉦脈社：53-79 ページ。
- 庄武憲子 2018「新刊紹介 四国大学新あわ学研究所 編『大学的徳島ガイド：こだわりの歩き方』、『徳島地域文化研究』（16）、徳島地域文化研究会：190-192 ページ。
- 武田俊輔 2008「ナショナリズムに抗する『郷土』―柳田国男の郷土教育批判を手がかりに」、神奈川大学評論編集専門委員会 編『神奈川大学評論』（59）、神奈川大学広報委員会：83-92 ページ。
- 長崎大学多文化社会学部（編）2018『大学的長崎ガイド―こだわりの歩き方』昭和堂。
- 原田容子 2022「〈書評〉鎌田真弓編『大学的オーストラリアガイド―こだわりの歩き方』」、『オーストラリア研究』35 (0)、オーストラリア学会：59-62 ページ。
- 山之内靖 2015『総力戦体制』筑摩書房（ちくま学芸文庫）。

